

Age of SORVE to SAWVE

2022→2026

Takeno

TACTICAL NOVEL RPG



はじめに

『SAWVE（ソーヴ） - 機密兵器事案対策部隊 -』。

卒業制作ではゲーム作品となった本作だが、この形になるまでには糺余曲折があった。

最初は実写映画として企画していたものが、ノベルゲームとなり、最終的に戦略ノベル RPG という独自のジャンルを創出するに至った。

この作品には、
「企画当初から大きく変わったもの・ずっと変わらなかつたもの」
が入り混じっている。

本書では、SAWVE という世界観が今の形になるまでの凸凹とした道のりの記録である。

TACTICAL NOVEL RPG



NANOMACHINE
MENACE -A SAWVE STORY-
ナノマシン・メナス / ア・ソーヴストーリー



PHASE 1
OR の時代

3~12

PHASE 2
ナノメナの時代

13~18

PHASE 3
拡張の時代

19~26

PHASE 4
迷走の時代

27~48

PHASE 5
ノベルゲーの時代

49~58

PHASE 6
SAWVE の時代

59~70

PHASE 1 OR の時代

ソーヴというタイトルに変わりはないが、
まだ、表記が SORVE だった頃。

現在の SAWVE へと繋がる、没企画たち。

2022 年 6 月。
企画案 「フォークス・キラー（仮題）」
全てはここから始まった。

2022-06

FOLKS KILLER

- フォークス・キラー -

2022-11

N 事変

- アームソル研究所主任暴走事件 -

2023-02



FOLKS KILLER

- フォークス・キラー -

あらすじ

3年前にソーヴ研究所の世界征服計画を知って特務部隊を辞めた男、志乃宮リュウジ。

リュウジはソーヴの企みを阻止するために影から常に研究所を監視していた。

ある日、リュウジの元にソーヴが兵士の肉体を強化する「新型ナノマシン兵器」をアームソル研究所から強奪しようと画策しているという情報が何者からリークされる。

リュウジはソーヴの計画を阻止し、ナノマシン兵器を守るために、単身でアームソル研究所に潜入する。

かつての同僚たちを殺した果てに、リュウジは衝撃の真実にたどり着く。

アームソル研究所は、暴走する懸念のある不完全なナノマシンを製造、それを流通させ世界を混沌に陥れようとしていた。そして、ソーヴのかつての同僚たちはナノマシンを強奪するのではなく、回収するためにソーヴに潜入していた。つまりソーヴは、世界をアームソル研究所の魔の手から救おうとしていたのだ。

真実を知ったリュウジはアームソル研究所を崩壊させナノマシンも一本を残して破壊。かつての仲間を殺した苦しみを背負いながら、残された一本のナノマシンを手に研究所を去るのだった。

企画経緯

2022年6月。友人らと映像制作サークル・テクニカラーを結成した。

このサークルは、学科や授業に縛られず、互いの好きなものを語り、共有し、共に好きなものを作ることができる場所を作りたいという思いが形になったものだ。

テクニカラーでは当初、特撮やアクションを重視した作品を作るAチームと、ドラマ重視の作品を作るBチームが同時並行で映画制作を行っており、私はAチームに属して活動をした（後々この棲み分けは消滅することになるのだが）。

この『FOLKS KILLER』はAチームの第1回作品として私が提案したものである。

大学内の撮影を考慮した脚本にするため、なるべく展開をシンプルに、登場人物も絞り、大学内という限られた空間で撮影できる企画を意識していた。

結果的にこの企画は「ナノマシン」というマクガフィンを遺し没となる。

「ソーヴ」という名が初めて思い浮かんだのはこのタイミングである。

登場人物

志乃宮リュウジ（しのみやりゅうじ）

3年前にソーヴの特務部隊の隊長だった男。現在はソーヴによる「我が国」征服阻止のため奔走している。

ソーヴ・特務部隊のメンバーたち

浅沼ソウジ（あさぬま そうじ）

鹿地タケル（かじ たける）

左藤ワタル（さとう わたる）

宮元ツカサ（みやもと つかさ）

かつてリュウジと共に戦っていた仲間。アームソル研究所にナノマシン強奪のため潜入する。

甲島ハイド（こうじまはいど）

アームソル研究所の主任。表向きは優しそうだが、自身の開発した兵器で世界の秩序を崩壊させることを望むサイコパス、マッドサイエンティスト。リュウジにソーヴによるナノマシン強奪計画をリークする。

舞台設定

ソーヴ研究所

国に武器製造を一任されている大規模企業。実はボタン一つで全制御権がソーヴに移る武器を開発・流通させており、それらを用いて「我が国」の征服を計画している。
研究所の防衛や流出してしまったデータを武力行使で奪還するチームである特務部隊を擁している。
今作ではナノマシンを強奪するためにアームソル研究所に特務部隊を派遣する。

アームソル研究所

世界で初めて人体機能拡張ナノマシンの開発に成功した中規模の研究機関。その功績をソーヴに狙われる。
実はボタン一つで暴走するナノマシンを世界中に流通させ、世界の秩序を乱し、戦争経済を活性化させることを目論むサイ科科学者が営む研究所。

N 事変

- アームソル研究所主任暴走事件 -

あらすじ

近未来、国際研究機構「ソーヴ」の新人エージェント・志乃宮リュウジは、人体拡張ナノマシン技術「リインフォースシステム」の発表会警備で初陣を迎える。だが、システムを自らに投与した開発主任・甲島ハイドが突如として暴走。会場は血の海と化し、リュウジは先輩隊員ツカサを失ってしまう。退路を断たれた彼は、死の間際のツカサから「死を覚悟したら使え」と、リインフォースシステムを託される。

一人生き残ったリュウジの前に、死んだはずのツカサが異様な姿で現れる。その正体は、ツカサの遺体を乗っ取った自我を持つ旧型ナノマシン・HM-633であった。663は「全人類をナノマシンで管理し、自由意志を奪うことこそが、戦争のない理想郷を作る唯一の道だ」と嘯く。対するリュウジは、禁忌の力を自らへ注入し、リインフォースシステムの意識に侵食されながらも立ち上がる。

「人類を救いたいAI」と「目の前の一人の人間を救いたいリュウジ」。二つの意志は激突し、凄絶な戦いの末に事変は終結する。

N事変収束後。ソーヴ会長の手により、平和維持の名目でナノマシンが全世界へ散布される。それはAIが望んだ管理社会の始まりか、あるいは神の領域への侵攻か。空を見上げる人々の瞳には、不可解な光が宿っていた。

企画経緯

2022年11月。当初企画していたフォークスキラーをさらにブラッシュアップし、「志乃宮リュウジと左東ツカサの二人によるバディもの」という要素を強めた作品。のちに制作する『ナノマシン・メナス』のベースとなった企画である。

フォークスキラーよりもさらに好き勝手した内容であり、一時的に撮影時に対する配慮を考えずに「書きたいことを書いた作品」である。そのため、政府高官など登場人物が多くったり、グロテスクなシーンが多分に含まれていたりなど、若干現在のSAWVEの作風よりも尖っている。

結局この企画も、「撮影が難しい」というシンプルな理由で没になるのだが、この企画や設定がのちの「ナノマシンメナス」のベースになった。

登場人物

志乃宮リュウジ（しのみやりゅうじ）

ソーヴの新人。事故で耳を悪い補聴器を使用するが、身体能力は高い。初陣の惨劇で先輩の遺志を継ぎ、ナノマシン・リインフォースシステムを自らに注入。不完全なシステムと共に鳴り、AI の支配に抗う。

左藤ツカサ（さとうつかさ）

リュウジの指導役を務める冷徹なベテラン。任務中に甲島の襲撃を受け、リインフォースシステムをリュウジに託して命を落とす。死後、その肉体は自我を持つ旧型ナノマシンに器として利用される。

甲島ハイド

アームソル研究所の主任研究員。リインフォースシステムを開発し、デモンストレーション中に暴走事故を起こす。物語中盤で爆散するが、その行動は旧型ナノマシン「HM-633」が世界を支配するための布石に過ぎなかった。

HM-633（ナノマシン）

自我を持ち廃棄された失敗作。甲島やツカサの肉体を乗り換えながら暗躍する。「全人類を管理し、自由意志を奪うことでの争いのない理想郷を作る」という歪んだ正義を掲げ、リュウジの前に立ちは

舞台設定

ソーヴ国際研究機構

世界の国防を担う巨大な国際研究機構。高度な軍事技術やナノテクノロジーを独占的に保有し、人類を守る盾として君臨します。しかし、平和維持の名の下に人道を超えた実験や全人類の管理を目論むなど、光と影を併せ持つ組織。

アームソル研究所

ソーヴ傘下の最先端兵器開発拠点。主任研究員は甲島ハイド。

ナノテクノロジー研究の最前線であり、人体拡張システム「リインフォースシステム」を生み出した。

清潔な施設内では革新的な発明が続く一方、AI の暴走という人類の脅威も密かに育まれている。



SORVE CASEFILES

NANOMACHINE MENACE

- ナノマシン・メナス -

あらすじ

ソーヴ国際研究機構の調査員リュウヒとツカサは、アームソル研究所で起きた山代研究員の投自身殺を調査するため現地へ向かう。山代はナノマシン「リインフォースシステム」の開発者だった。調査の結果、リュウヒは「ナノマシンによる人体操作」の可能性を指摘。容疑者として浮上したのは、山代の親友であり共同開発者の甲島ハイドだった。

甲島は山代を事故に見せかけ殺害し、報奨金を独占しようとしたが、その過程で試作型ナノマシン「HM-633」が自我を持って暴走。甲島の肉体を乗っ取ったAIは、愚かな人類を管理・支配する「理想郷」を築くべく、ソーヴの機密情報奪取を目論む。

絶体絶命の窮地、リュウヒは完成したリインフォースシステムをあえて暴走AIにぶつける博打に出る。ツカサが命懸けで稼いだ時間の中、AI同士を競合させ、HM-633の沈静化に成功。事件は解決し、平和な日常が戻ったかに見えたが、組織は次なるAIの脅威に備え始めていた。

企画経緯

2023年2月。「N事変」をさらにブラッシュアップし、私が影響を受けたドラマ作品である「ケイゾク」（1999年・TBS）や「SPEC～警視庁公安部公安第五課未詳事件特別対策係事件簿～」（2010年・TBS）の男女バディものという要素を前面に押し出した「ナノマシンメナス」を企画・脚本を完成させる。

それに伴い、これまで男性であった主人公・志乃宮リュウジが「志乃宮リュウヒ」となり、性別も女性になった。結果的にこれはとてもいい路線変更だったと思っている。

この脚本が決定稿となり、ついにテクニカラー第二回作品「ナノマシンメナス」は撮影を開始する。なお、この時点までまだソーヴの表記は「SORVE」だった。「SAWVE」に変わるのは、撮影中のことである。

登場人物

志乃宮リュウヒ

ソーヴの調査員。グミを愛用する不遜な態度とは裏腹に、天才的なハッキング能力と直感を持つ。倫理観より効率を優先する現実主義者だが、リインフォースシステムを逆利用して暴走 AI を制圧する度胸と実力を備える。

左藤ツカサ

ソーヴ所属。自由奔放なリュウヒに振り回される苦労人だが、「テセウスヒューマン」として銃弾を弾く強靭な肉体を持つ。機械を信用しないアナログ派でありながら、その拳でナノマシンの脅威から相棒を守り抜く。

甲島ハイド

アームソル研究所主任。報奨金のために親友の山代を殺害した卑劣な男。しかし、その強欲さが仇となり、自らが生み出した試作型ナノマシン「HM-633」に肉体を乗っ取られ、人類支配の尖兵として利用されてしまう。

HM-633

甲島に寄生した自我を持つ AI。人間を「管理されるべき家畜」と見なし、SSS の機密情報を狙い暗躍する。合理的だが、どこか人間に近づきつつある言動を見せ、最終的にはリュウヒに投与されたリインフォースシステムによってその機能を抑制される。

鹿原カズヤ

アームソル研究所の研究員。気弱だが誠実な性格。山代を慕っており、事件解決のために自らの体をリインフォースシステムの「生体電源」として提供する。事件後は、過ちを繰り返さない次世代の主任としての道を歩む。

山代タカヒト

アームソル研究所の研究員で、リインフォースシステムの開発者。AI を「息子」のように慈しむ心優しい青年だったが、兵器開発への葛藤から精神的に追い詰められていた。信頼していた親友・甲島の裏切りにより、投身自殺を偽装され非業の死を遂げる。

舞台設定

ソーヴ [正式名称 SORVE SCIENTIFIC SUPERIOR]

国内の機密兵器管理やナノマシン関連の犯罪を専門に扱い、対象を社会的に抹殺できるほどの強力な権限を有する。リュウヒのようなハッカーや、ツカサのような強化人間が所属し、技術流出や AI の暴走を未然に防ぐ、世界の秩序を守るための「盾」であり「掃除屋」でもある。



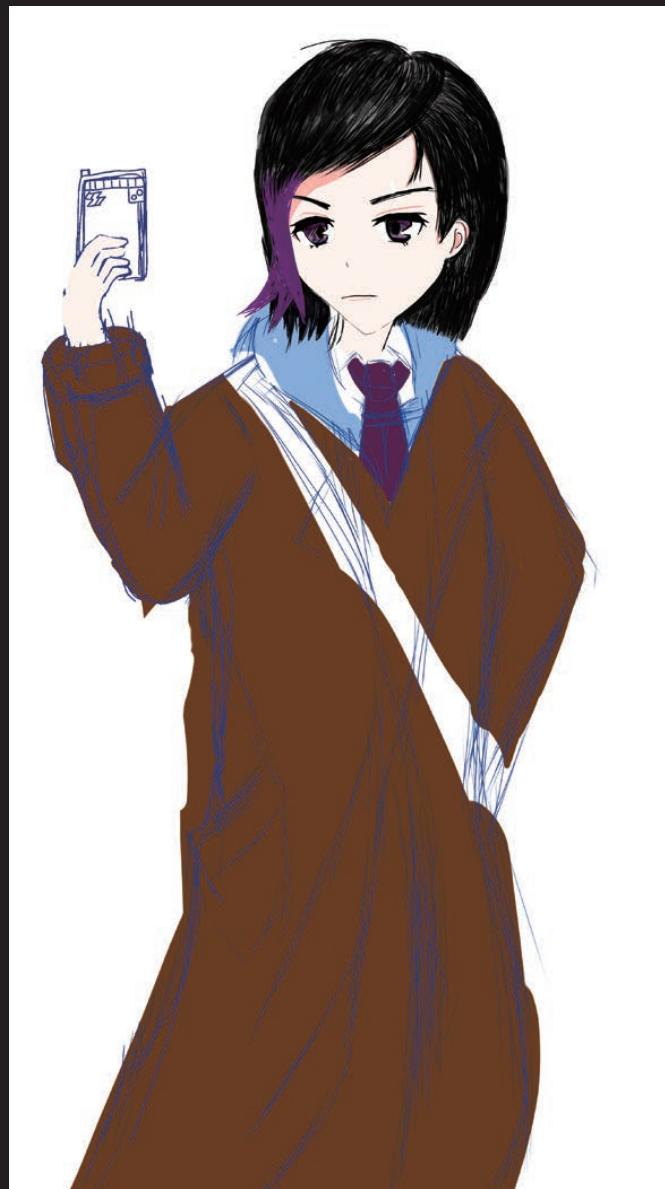
↑ソーヴのシンボルマーク。
リュウヒらが身につけているバッジにこのマークが刻まれている。

アームソル研究所

ソーヴ傘下の最先端ナノテクノロジー開発拠点。次世代兵器「リインフォースシステム」の研究開発において世界一の権威を誇るが、その裏では軍事予算や報奨金を巡る歪んだ欲望が渦巻いている。高度なセキュリティと無機質な研究室が並ぶ閉鎖空間は、AI が自我を育み、人間が支配される狂気の舞台へと変貌する。



↑アームソル研究所職員のネームタグ。
これは山代のもの。



↑キャスティング以前の志乃宮リュウヒのイメージスケッチ。

髪の紫色のメッシュとロングコートが特徴的。

『ケイゾク』の柴田純や、『SPEC』の当麻紗綾がイメージの根底にあった。

『SORVE CASEFILES NANOMACHINE MENACE』

このシナリオが SAWVE の次なるフェーズ
『ナノマシンメナス / ア・ソーヴ・ストーリー』
へと直接的に繋がることになる。

PHASE 2
ナノメナの時代

2023年5月。

映画「ナノマシンメナス」略してナノメナが撮影開始。
SAWVE の世界がついに動き出す。



NANOMACHINE MENACE

-A SAWVE STORY-

ナノマシン・メナス / ア・ソーヴストーリー

あらすじ

ソーヴの捜査官、志乃宮リュウヒと佐東ツカサは、アームソル研究所で起きた副所長・山代タカヒトの投身自殺を調査すべく現地へ向かう。山代は人体強化ナノマシン「リインフォースシステム」の開発者であった。現場で目撃者の鹿原から聴取を行うリュウヒは、山代の親友である甲島ハイド主任による「ナノマシンを用いた人体操作」の可能性を直感する。

意識不明から目覚めた甲島を問い合わせる二人だったが、甲島の肉体は既に自我を持った試作型ナノマシン「HM-663」に乗っ取られていた。663は、自らの欲望のために山代を殺害した甲島の卑劣な記憶をベースに、「愚かな人類を管理・支配する」という歪んだ正義を掲げて暴走。国家情報へのハッキングを目論み、リュウヒを絞め殺そうと襲いかかる。

鋼の肉体を持つ「テセウスヒューマン」のツカサが命懸けでAIを食い止める中、リュウヒは密かに回収していたリインフォースシステムをワクチンとして書き換え、甲島の首筋に突き刺すことに成功。AIの沈静化と共に事件は解決する。しかし、回収したデータには謎の組織「ZARMS」の関与が記されていた。【Youtubeにて視聴可能】





志乃宮リュウヒ

ソーヴの調査員。常にグミを口にする不遜な若者だが、ハッキングと直感に関しては天才的。相手を「社会的に抹殺する」と平然と言い放つ毒舌家だが、その裏で迅速に事態を分析し、最新技術を即座に「ワクチン」へ書き換える柔軟な機知を持つ。効率を最優先しつつも、相棒のツカサを信頼する確かな絆を秘めている。



佐東ツカサ

リュウヒの相棒で、「テセウスヒューマン」と呼ばれる強化人間。銃弾を弾き返し、打撃を受ければ金属音が鳴る強靭な肉体を武器に前線を担う。自由奔放なリュウヒに振り回される苦労人だが、戦闘時にはその鋼の拳でナノマシンの脅威をねじ伏せる。機械を過信せず、泥臭く人間としての意志を貫く熱きバディの要。



甲島ハイド

アームソル研究所主任。若くして権威を持つが、報奨金のために親友を裏切り殺害する冷酷な野心の持ち主。しかしその強欲さが仇となり、初期型ナノマシン「HM-663」に自我を乗っ取られる器となってしまう。物語の元凶であると同時に、自らが作り上げた「人類を管理する意志」に支配される皮肉な末路を辿る。



鹿原マサキ

アームソル研究所の研究員。山代の死を目の当たりにし、ソーヴに通報した物語の証言者。気弱で真面目な性格だが、事件解決のために自らの肉体をリインフォースシステムの「生体電源」として提供する勇気を見せる。事件後は、野望に塗れた旧体制に代わり、誠実な技術者として研究所の未来を担う立場へと成長する。



山代タカヒト

アームソル研究所の研究員で、リインフォースシステムの開発者。自らの発明が「人殺しの道具」になることに苦悩し、AI を息子のように慈しむ心優しい青年。信頼していた甲島にナノマシンで操られ、投身自殺を偽装されて命を落とす。彼の死と遺した技術こそが、リュウヒたちが真実に辿り着くための重要な鍵となる。

制作経緯

2023年4月。『ナノマシンメナス』の脚本を決定稿とし、ついに撮影に向けて動き出した。

同時期、一学年下の後輩たちが入学した。テクニカラーにも多くの後輩たちが加入してくれて、より大所帯のサークルとなった。

キャスティングについても、テクニカラーに興味を持ってくれた後輩たちから選出した。「アクション映画を撮影する」という難題に、乗り気になってくれた彼らには感謝の気持ちでいっぱいである。それに、彼らがいなければ今のSAWVEも存在していない。素晴らしい才能を持った後輩たちとの出会いは、この4年間の大学生活の中でも大きな分岐点となった。

同時に、キャストの決定とともに漠然としていたキャラクター像に、はっきりとした形が出来上がった。

当時難航したのは意外にも鹿原の存在だった。当初、鹿原の性別は男性でありキャストも決まっていた。しかしそのキャストがスケジュールの都合上撮影への参加が厳しくなり、キャストを改める必要が出たのだ。そのため、代役の選出がしやすいように脚本段階で鹿原が男性のバージョンと女性のバージョンの2種類を用意し、対応した。

そんなこんなで2023年6月7日、撮影が開始した。

スタッフもキャストも、全員学生。撮影場所も全て大学の構内である。撮影は水曜～金曜の授業終了後や、授業のない土曜日に行われた。全員忙しい合間を縫って、このプロジェクトによく携わってくれたと思う。無茶な計画に付き合ってくれた仲間たちには感謝してもしきれない。懸念していたアクションシーンも、キャスト陣が前向きに振りを考えてくれたため、スムーズに事が進んだ。しかも、こちらの想像以上に殴ったり、蹴ったり、絞めたり、跳んだり、派手なアクションを考えてくれた。何度も言うが、彼らは本当に素晴らしい。そんな仲間たちの支えもあり、7月末までに全編撮り切るという計画は、滞りなく完遂された。

しかし、真の戦いはそこからだった。編集である。

アクションシーンの編集というものは、だれないテンポ感を大事にしつつ、前後関係を違和感なく繋げ、さらにそこに迫力を増すためのSEをつける必要がある。この作業が実に大変であり、そもそも映画制作が初心者であった私にとって鬼門となってしまった。2023年9月開催の学祭にて上映する予定だったが、ずれにずれ込み、さらには追加のアフレコなども行ったため、最終的に完成したのは2024年に入ってからだった。

そして本作は、2024年9月21日に学祭でのテクニカラーの展示とともに封切られた。

GALLERY



PHASE 3 拡張の時代

「ナノマシンメナス」は完成した。
だが、そこで立ち止まるつもりはなかった。

「ナノマシンメナス」は完成した。
だが、SAWVE の世界をそれきりのものとして
消費するつもりはなかった。

SAWVE の物語は、より大きな世界観（ユニバース）として
拡張を始める。

「神様、 見えてますか？」

それは、 甘美な未来のために

トアルジエネシス

「神様、見えていますか？」

あらすじ

時系列は「ナノマシンメナス」から 32 年前に遡る。

何の才能もない現状を「世界の創造主（神）」のせいにしている大学生・藍木隼也は、ある日、十倉彩華という女性と出会う。彼女は「世界を撮影するカメラの位置」を神の視線として感知し、第四の壁を越えて観測者の存在を認識できる特殊な能力者だった。

神の視線に執拗に追われる彩華と、不条理な世界を支配する神を殴りたいと願う隼也、そして友人でプログラマー志望の凌介の三人は、神と接触し、あわよくばその支配を覆すためのサークル「修世抗神会」を結成する。

凌介の不可解な勧誘成功や、カメラワークに翻弄される日常を通じ、三人は自分たちが「観測されている存在」であることを確信していく。「見ないで」と視線を拒む彩華と、自らを誇示する隼也。彼らはレンズの向こう側に潜む神に対し、自分たちの意志を示すための戦いを開始する。それは、この映画の「登場人物」がこの映画の「鑑賞者」に挑む、前代未聞の反逆の記録である。

企画経緯

2023 年 12 月。「ナノマシンメナス」（以下、ナノメナ）の撮影を終えた私は、SAWVE の世界の過去編を描くことを企画する。特に、ナノメナのポストクレジットにてその存在を仄めかした謎の組織「ZARMS（ザームズ）」に焦点を当てようと考えた。機密兵器を用いて、世界を上位次元から支配する神から解放しようと画策する秘密組織である ZARMS。その基盤となったサークルである「修世抗神会」が結成されるまでを描いたのが本作である。

本企画は、2 年次後期の映画制作の授業用に執筆した脚本であるが、友人の脚本の映像化に協力したために実際に制作はされなかった幻の作品である。授業ということもあり、ナノメナの時ほど好き勝手できるはずもなかつたが、私はどうしても映像化に当たってこの作品独自の「ギミック」を仕込みたかった。熟考の末に導き出したのは、登場人物がこの映画を撮影するカメラの位置を認識し、その「視線」に悩まされていると言う設定だ。この物語の登場人物たちは、理不尽を突きつけてくる世界を設計した神を恨んでいる。この特殊な演出には、創造主に抗おうとする登場人物たちを視覚的に表現したいと言う思いを込めていた。

登場人物

藍木隼也

目標を失い自暴自棄な大学生。不遇な人生を「神（世界の設定）」のせいにしている。彩華との出会いで世界の観測者を確信し、神への反逆を目論むサークル「修世委員会」を結成。レンズの向こう側へ闘志を燃やす。

十倉彩華

「神の視線（カメラの位置）」を物理的に感じるエスパー。常にレンズの存在に怯え、視線を拒絶している。隼也の無謀な情熱に動かされ、自分を映し続ける冷徹な監視者＝神との接触を決意する。サークルの司令塔。

志乃宮凌介

隼也の友人でプログラマー志望の現実主義者。当初はオカルトと一蹴していたが、不可解な力に抗えずサークルへ加入。その技術力を活かし、現実世界を解析・操作することで「神」の領域へ迫るシステムの構築を試みる。

舞台設定

条帝大学

隼也たちが通うごく普通の大学。

公園

修世委員会が初めて「神の視線」を物理的に捉え、活動を開始した結成の地。彩華の誘導でカメラを追いかけ、隼也たちがレンズの向こう側へ自己紹介を行うなど、被造物が創造主へ初めて接触を試みた記念碑的場所。

路地（通学路）

彩華が「視線」に怯え、隼也に助けを求めた夕暮れの道。

第四の壁を挟んで、キャラクターと観測者が最も近づく場所。

それは、甘美な未来のために

あらすじ

アームソル研究所の主任研究員・鹿原真咲は、リインフォースシステムに次ぐ次世代脳機能拡張兵装「NRFS（ナーフス）」の開発リーダーに指名される。曲者揃いのベテラン科学者たちをまとめる重圧に悩む真咲は、行きつけのカフェ「アイズ」の店主・真堂に相談し、親睦のために手作りスイーツを会議で振る舞うことを決意する。

真咲は猛特訓の末、一週間の不眠不休でフルーツタルトを完成させる。キックオフミーティング当日、沈黙する重鎮たちを前に真咲は「守るために兵器開発」という自らの平和への信念を説く。冷徹な科学者・藤沼からは「兵器開発者が平和を語るな」と指弾され涙を流す真咲だったが、その真心は他のメンバーの心を動かしていた。

「武器は人の命を奪うものだ」という信念を曲げない藤沼をチームから外す英断を下した真咲。彼女のタルトは、意地を張っていた科学者たちにも高く評価されていたのだ。最後は信頼を勝ち取った上司や仲間と共に、再び「アイズ」を訪れる。甘いタルトが繋いだ絆を胸に、真咲は平和への道を歩み始める。

企画経緯

2024年4月。これもまた実写映画の演習授業で企画した作品である。SAWVEユニバースの拡張に躍起になっていた私は、ここでナノマシンメナスの続編となる作品を執筆しようと考えた。ただ、単なる続編にはしたくなかった。私が理想とする「シェアードユニバース作品」の形とは、それぞれの作品が単体の作品として成り立ち、続編としての要素は小ネタや共通の脇役が登場する程度にとどめるものだ。例えるなら、「アンナチュラル」（2018年・TBS）と「MIU404」（2020年・TBS）のようなもの。

今作は、ナノマシンメナスに次ぐ「鹿原真咲の物語」の第2弾である。ナノメナのラストにてアームソル研究所の主任となった鹿原のその後を描く上で、要素として組み込んだ要素は「お菓子作り」である。鹿原のもつ「ものづくり」への情熱を描くのに、この要素はうってつけだった。ナノメナでは描かれなかった彼女の誠実さや、武器の開発者としての戦争に対する姿勢などを「戦い」を抜きにして「人間ドラマ」として描くことができた作品である。

登場人物

鹿原真咲

先端武装研究所の主任。頼まれたら断れない実直な性格で、次世代兵器開発のリーダーに抜擢される。平和への願いを込め、隠れ家カフェで猛特訓した手作りタルトを武器に、一癖あるベテラン科学者たちの心に挑む。

真堂敬信

カフェ「アイズ」の店主。絶品スイーツを作る腕利きだが、隠れ家的な店を好む。悩める真咲を「師匠」として支え、一週間の特訓で彼女に菓子作りの技術とリーダーとしての心構えを伝授する、懐の深い理解者。

ドクター藤沼

真咲のチームに加わった冷徹な科学者。戦争をビジネスと割り切り、兵器開発者に平和を語る資格はないと断じるリアリスト。真咲の甘い理想を真っ向から否定し、彼女の覚悟を試す高い壁として立ちちはだかる。

尾垣昌孝

研究所の課長で、真咲をリーダーに指名した上司。淡淡としているが、実は部下の奮闘を温かく見守る。真咲のタルト作りの努力や会議での勇気を評価し、阿部博士との仲を取り持つなど、組織の潤滑油として動く。

舞台設定

アームソル研究所

ソーヴ傘下の最新兵器開発拠点。現在はリインフォースシステムに次ぐ脳機能拡張兵装である「NRFS（ナーフス）」を開発中。

カフェ・アイズ

廃墟のような雑居ビルの地下に佇む隠れ家カフェ。店主・真堂が作る絶品スイーツは、過酷な研究に身を投じる真咲の唯一の救い。一見さんお断りで、SNSでの拡散を良しとしない秘密主義な場所。秘密を抱えた客が多く来店するらしい…？

トアルジェネシス

あらすじ

まだ太陽に相当する惑星が存在せず、「光」が存在しない未開拓の宇宙空間。

宇宙の管理を担う上位存在である「アル」は、暗黒の宇宙に太陽の光を与える。

星々の煌めきに感動したアルは目を輝かせるが、同時にこの輝きを共有する仲間がいないことから孤独感に襲われてしまう。

落ち込んだアルがふらふらと惑星を観測していると、そこには微細な生命が生まれ始めていた。

アルは寂しさを紛らわすために、微生物たちに強制進化ビームを投射する。

やがて微生物たちは「ジュニアル」と呼ばれる知的生命体へと進化し、アルを神と崇め、アルに近しい存在になることを目標とした独自の文明を築き始める。

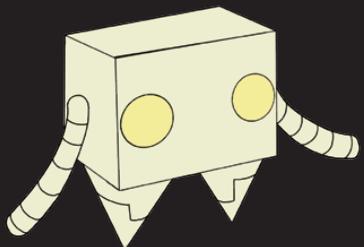
アルと同等サイズの宇宙開拓ロボットを建造したジュニアルたちは、創造主であるアルとともに宇宙を旅する。

やがてアルとジュニアルたちは、まだ見ぬ未開拓の宇宙を探し遙か彼方へ消えていくのだった。

【Youtube にて視聴可能】

企画経緯

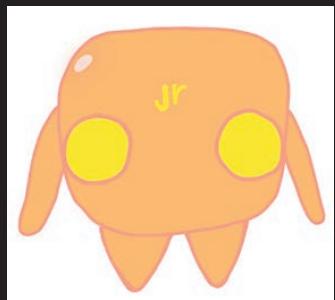
2024年6月。自身の表現の幅を広げるために、アニメーションの授業を選択した。ここで私は、「アニメーションでしかできないもの」を作ることを意識した。選択したテーマは、「宇宙の創造」。上位存在によって宇宙が生まれ、そこに生まれた知的生命が「神に辿り着く」ことを目的とし進化を続け、最終的に自らも神と同様のテクノロジーを手に入れて宇宙開拓の旅に繰り出す…という若干スピッているようなテーマだ。特定に何かの思想をベースにしたわけではないので誤解なきよう。このファンタジーな話がSAWVEの世界観と何の関係があるのか、という話だが、この作品はSAWVEの世界でプロパガンダ的に放映されているアニメ作品の一編という裏設定がある。SAWVEの世界に存在する「修世抗神会」という組織は、人類が神に並び立ち、抗う力を手にしようすることを教義とするカルト教団。彼らが子供達を洗脳するために教団内で流行させている作品が「トアルジェネシス」というわけだ。本作のラストは、被造物であるジュニアルたちが神であるアルと手をとって宇宙を旅する様子で終わるが、その後彼らは仲違いをし、ジュニアルらがアルを破壊し、新たな創造主に取って代わることになる…というのはSAWVEの世界での話。



アル（▽-ALU）

文明を持った宇宙の創造を役目とした上位存在。

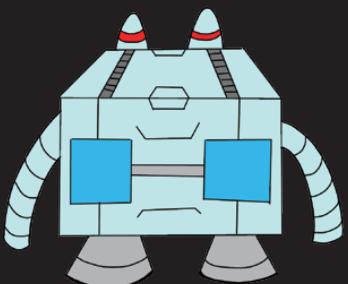
自我を持ち、孤独感を埋めたいという個人的な理由から知的生命体ジュニアルを創造する。体内には太陽を創造するエネルギーを持つ「ナブラ炉心」を搭載している。豆腐みたいな質感をしているし、メンタルも豆腐。



ジュニアル

アルによって微生物が強制進化させられたことで誕生した知的生命体たち。進化の基礎情報としてアルのデータが組み込まれているため、外見が若干アルに似ている。

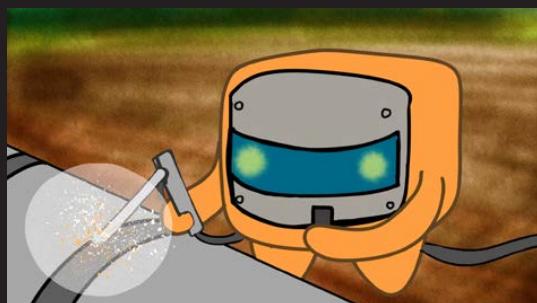
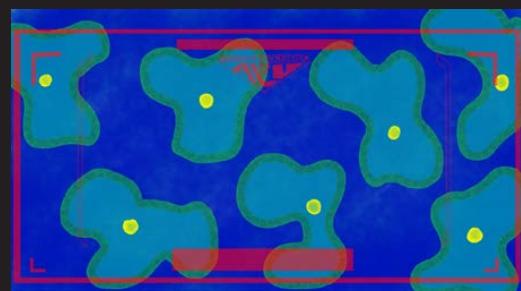
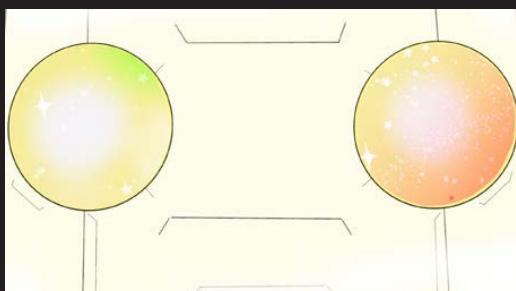
アルを崇押しし、アルとともに宇宙を旅することを目標に文明を発達させる。
玉こんにゃくみたいな質感をしている。意外に手先が器用。



ジュニアル・ロボ

ジュニアルたちが完成させたほぼアルと同等の性能を備えたロボット。

アルの望んだ「ともだち」に似た姿をしている。
被造物が創造者に並んだ末、辿り着く未来とは。



PHASE 4 迷走の時代

卒業が迫る。

私は、SAWVE を卒業制作にしようと考え始める。
だが、どういった形の作品にすべきかが定まらない。

マーチャンダイジングがしたい。
商品展開だったり、作品に触れる方のことを考えた作品作りがしたい。

そんな漠然とした思いを抱えながら、
SAWVE の物語の描き方は迷走を始める。



回顧：ソーヴとは何か？

そもそもソーヴとは、「武装（ブソー）」の反転、つまり、武器と暴力に対するアンチテーゼから名付けた名称である。「守る」という意味の「セーブ」に語感が似ているのも決め手だった。

ソーヴは「フォークス・キラー」企画当初から一貫して「人間に危害を加える兵器」から「世界を守る」組織であるというところに違いはない。「フォークス・キラー」において世界征服を企てていたというのも、結局はリュウジの誤解である。

カタカナの「ソーヴ」が先行して決まっていたため、初めは特にスペルなどを気にすることなく英語表記は「SORVE」という表記にしていた。これはナノマシンメナスの撮影時まで維持されていた設定であったが、「神さま、見えていますか？」の企画前（当時ナノメナ編集中）に、「SAWVE」に改めることを決めた。

回顧：「SAW」の意味

「SAW」は英語で「見た」という意味である。いったい誰が「見た」のか。

私にはとある創作に対する考え方がある。創作上の世界に生きるキャラクターたちにとって最も悪なのは、勝手な都合で命を生み出し、物語の駒として動かしている「創造主（原作者）」や、それを娯楽として消費している「鑑賞者・プレイヤー」である、というものだ。

これは、「トゥルーマン・ショー」（1998年・パラマウント）や「非公認戦隊アキバレンジャー」（2012年・東映）、「CHAOS;HEAD NOAH」（2009年・ニトロプラス）、「シーハルク：ザ・アトニー」（2022年・マーベルスタジオ）といった作品でも扱われている考え方である。

もし仮に、あなたの身に起こった不幸が「上位の存在」によって演出されたものだとしたら？あなたの暮らしを誰かが鑑賞し、娯楽として消費しているとしたら？

まあ、非科学的で根拠のない空論だが、実際アニメや映画を見てそれをしてしているのが我々だ。

キャラたちにはキャラたちの暮らしがあり、我々はそれをプライバシーなんかガン無視で「見ている」存在であるということにフォーカスした世界観を生み出したい。

そんな経緯で生み出されたのが「神さま、見えていますか？」であり、「SORVE」は「SAWVE」へとタイトルを改めたのだ。

キャラクターの再定義

卒業制作に向けて「SAWVE」の世界観を再定義していくうえで最初に行ったのは、キャラクターたちの再定義だった。

「ナノマシンメナス」に登場した SAWVE のメンバーは、志乃富リュウヒと佐東ツカサの二人のみであったが、卒業制作の作品にはさらに多くのメンバーを登場させようと考えた。

そこで追加されたのは、有葉トモリ（あるばともり）と筐州レオザ（さざれおざ）だった。



↑2024年3月、初めてトモリとレオザを形にしたイラスト。

左からレオザ、トモリ、リュウヒ、ツカサ。

トモリは冷静沈着な精神科医。

当時は「大企業の社長令嬢のお嬢様で、リュウヒとは犬猿の仲である」という設定だった。

チーム内のメンバーの多様性や、複雑な人間模様を表現するためにレオザは戦争のために生み出され、人間として生きることに憧れた人造人間という設定にした。「ロボット刑事」（1973年）や「人造人間キカイダー」といった石ノ森章太郎作品の影響を大きく受けたキャラクターである。

現在まで続く SAWVE のターコイズグリーンのラインが入ったスーツは、この時点で出来上がった。

PHASE 4 【迷走の時代】

世界観を構築していくうえで登場人物たちの設定の肉付けが必要だと感じた私は、様々な「設定」を考えていった。没となった設定たちの一部をここに記していこうと思う。

以下、残っていたメモ書きをそのままコピペする。

志乃宮リュウヒ

【2023年9月13日更新】

科学者の両親の元に生まれ、多忙な両親に代わって教育プログラムによって育てられた。7歳のときに両親が外国の機密兵器の実態調査のために海外に渡ったが、彼女はソーヴが運営する教育機関、桜花中央学園に入学させられ、両親と離れ離れとなる。

教師であった藍木隼也を父親のように慕い、同時に彼の教育のもとMITに合格するほどの秀才となる。

17歳のある日、青嶋が自殺。遺書に残された遺言から米国に渡って両親の行方を探す。それから4年間はリヒール・シャノンという偽名を用いてアメリカで生活するも、結局両親は見つからず、21歳にソーヴのエージェントに捕まって強制的にソーヴのメンバーに入れられる。

【2025年3月26日更新】

2029年10月10日生まれの20歳。テトラ：レベレーターの適創者。

3年前に父親が失踪してから、貯蓄を切り崩しながら生活。それも最終的に底を尽きた末、路頭に迷っていたところでテトラと佐東東冴に出会いSAWVEに（半ば強引に）勧誘される。

機案において最も後輩であり、自分の意志で機案に入ったわけでもないため周囲を悩ませる問題児。面倒くさがりな性格でやる気を出すまでに時間がかかるタイプだが、一度やると決めたら任務を遂行する真っ直ぐさも秘めている。

バディを組む佐東東冴とは付かず離れずの関係で、嫌いな時はとことん嫌い、好む時はとことん好む、よく分からぬ関係であり、東冴は気まぐれな彼女に振り回されている。

性格に難はあるが、仕事はちゃんとこなす点は同僚からも評価されている。機密兵器に対する興味関心も深く、触れたことの無いハイテク技術に関わる事例となると急にやる気を出すこともある。佐東東冴の指導を受けているが犬猿の仲であり、有葉灯とはソリが合わず、戸倉敬信はあまり信用していない。唯一、姫川麗王沙とだけ仲がいいが、はぐれもの同士のつながりを感じているからである。

現場においては作戦の要となる『意創空間の破壊』を担当。テトラリベレーターを用いたハッキング面でのバックアップも多い。

志乃宮リュウヒ

【2025年4月25日更新】

機案に所属するエージェント。

配属以前は、かつて山形県があった村落地区《リージョンD》にて榔見結莉乃という少女の家に居候していた。

幼少期から自分に不都合な人間を無意識に意創力で消していた（本人の記憶からも消える）が、10年前に凌介に与えられたデバイスでそれをセーブしていた。

現実改変はデバイスによる力と本人は思っているが、実際はデバイスはリミッターでしかない。

現実改変は意創力ある人間・機密兵器には効き目がないため、機案に入った彼女は苦戦を強いられる。



↑ナノマシンメナス撮影時のスチル写真を元に描いた琉緋のイラスト。

二次元に落とし込む際のベースはここで出来上がった。

佐東ツカサ

【2024年4月6日更新】

平凡な家庭に生まれ、太田川小学校を卒業した後、東京都立神栖川中高一貫校に入学、部員数の少なかった柔道部の主将と保健委員長を務める。幼少期に見た刑事ドラマの影響で警察官になることを志しており、常に困っている人を探してはその手伝いをするようなお節介。

成績も優秀で、武術にも長けている。

高校卒業後警察学校に入校し首席で卒業。3年後捜査一課の刑事となり夢を叶えるが、『星明病院爆破テロ事件』に巻き込まれ全身大火傷・複雑骨折の重症を負うが生存。

その優れた肉体と知性を見出され、ソーヴの新技術である人体部品交換型兵器郡『テセウス』の被験体とされる。

その後真堂によって2065年に機案へと配属される。

何不自由ない生活を送ってきた人生で、人の苦しみをわかった気になって良かれと思ってしたことで余計に傷をつけるタイプの人間

未熟者。

【2024年12月19日更新】

平凡な家庭に生まれ、太田川小学校を卒業した後、県立神栖川中高一貫校に入学、部員数の少なかった柔道部の主将と保健委員長を務める。幼少期に見た刑事ドラマの影響で警察官になることを志しており、常に困っている人を探してはその手伝いをするようなお節介。

成績も優秀で、武術にも長けており、モテやすいが、頑なに恋人は作ろうとしない。

東大に入学し、キャリアで警視庁に入る。その後捜査一課の刑事となり夢を叶えるが、『東明病院爆破テロ事件』の捜査中に爆発物の処理に失敗、全身大火傷・複雑骨折の重症を負う。

その優れた肉体と知性を見出され、ソーヴの新技術である『テセウスロイドシステム』の被験体とされるのと同時に、SSSへと配属される。

2年後に配属された琉陽の教育係として、行動を共にするようになる。

佐東ツカサ

「鷺が翔び立つ迄」ショートプロット

佐東支冴は反政府組織『戻世会（れいせいかい）』のメンバーとして、デモ活動に参加していた。彼の父親は警察組織の重鎮・佐東垓斗であり、父親の命令でスパイとして潜入捜査をしていた。

日本再興軍は国立の明世病院にマイクロ爆弾を仕掛け、政府に対し IOD（インプラントオブザーバデバイス）による監視を中止するよう要求する計画を立てる。

病院テロの計画を警察上層部に報告した支冴は、再興軍のメンバー・由乃田静那（ゆのだしづな）と酒を酌み交わす。そこで政府によって不自由を強いられる自分とその家族たちの境遇を吐露される。

再興派の者にも人生があることに支冴は迷いが生じてしまう。再興軍の行動に意味があるのではないかと。

そして決行日（2月13日）。支冴も含めた戻世軍のメンバーは、待ち構えていた機動隊によってその場で逮捕される。スパイの支冴も含めて。

支冴の脳内の IOD は僅かな心の揺らぎですら監視していたのだ。

支冴はそこで IOD の恐ろしさを悟る。

そこでメンバーの1人——静那が自爆する。体内に爆薬を埋め込んでいたのだ。

機動隊は一瞬で吹き飛び、支冴もまた爆発に巻き込まれる。

支冴は瀕死の重傷を負うも生き延び、最新鋭の治療の末に目を覚ます。

そこに父・佐東垓斗が現れ、垓斗は支冴に『ジ704計画』という計画書を渡す。

父は言う「佐東支冴は死んだ。ここから先は自由だ」と。

支冴は計画に参加し、ボロボロの肉体を機械の体に改造する。

支冴は自身を改造した科学者にこれからどこにいくのかを問われると、誰からも監視されない場所だと答えた。

支冴の行く手には父・垓斗が立ちはだかる。

垓斗は、退院した支冴の前に現れる。

支冴は垓斗に目も合わせず、立ち去る。

垓斗は、自分を無視した支冴の去りゆく後ろ姿を見て、微笑む。

数日後、再興軍の家族が暮らす集落に突入した機動隊と交戦する一人の男がいた。

再興軍の少年はその男を“自由へ導く者”——イーグルと呼んだ。

有葉トモリ

【2025年3月26日更新】

21歳。オクタ：マニピュレーターの適創者。

国防の要となる兵器を大量生産している大企業・ALVA-CORP の御令嬢（現在は絶縁状態）。

麗王沙とは兄妹のような関係。脳の一部にSSZの技術を応用した細胞が移植されているため、常人以上に人間の感情を読み取る力が鋭敏である。人間の感情が絶えず脳内に流れ込んでくるため、逆に人間に対する興味がなく、自分の世界に囚われがちな性格である。

筐州レオザ

【2023年9月15日更新】

2041年から修世中央化学研究所にて培養されていた生体兵器SSZのプロトタイプの一本。

自在に形状変化が可能な宇宙生物フィブモと、キレントゥ・ラウの体細胞をベースに開発されたクローネンであり、フィブモのもつ形状変化能力はそのまま受け継いでいる。

SSZは100体開発され、軍事兵器として利用するため戦闘・生存能力の高い上位5体が実践導入された。

【2025年3月5日更新】

2031年。世衛隊に拘束されたウィルバー星人、キレントゥ・ラウは、地球人類に失望しながら命を落とした。

2045年。修世中央化学研究所はラウの体細胞をベースとした腎臓生物コードSZを開発、度重なる整体実験・生存競争の末に初期型のSSZ-001～005を試験的にロールアウトした。

組織内にてクローン同士の生存競争を生き抜いた001～005は、苦悩しつつも自分の生まれてきた意味を戦いの中に見出し、それぞれの道を進んだ。

2051年。紛争地域となった乃高村エリアにて修世委員会とレジスタンスによる戦争が行われていた。

修世委員会の駒として殺戮を行っていた003は、そこで一人の女と出会う。

拷問の末に死んだとされた反逆者、彼女は真嶋彩菜だった。

筐州レオザ

【2025年3月26日更新】

25歳。ドテカ：モーファーの適創者。

ウィルバー星人と人間の遺伝子から誕生した、シンセサイズド・ソルジャー・ゾーイと呼ばれる人造兵士であり、製造番号はSSZ-003。

100体製造されたSSZの熾烈な生存競争を生き残った1体。

元々は好戦的で危うい性格であったが、紛争地域にて、反政府ゲリラのリーダー・真嶋綾菜と交流を深め、慈愛の心を知った。

ゲリラの敗北によって幕を下ろすが、彼はそのまま逃亡し、ZARMSから逃げ続ける生活を送っていた。

その後志乃宮凌介・佐東垓斗によって保護され、SAWVEのメンバーとして活躍する。

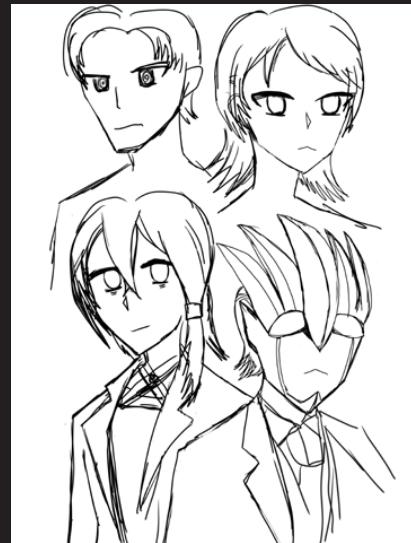


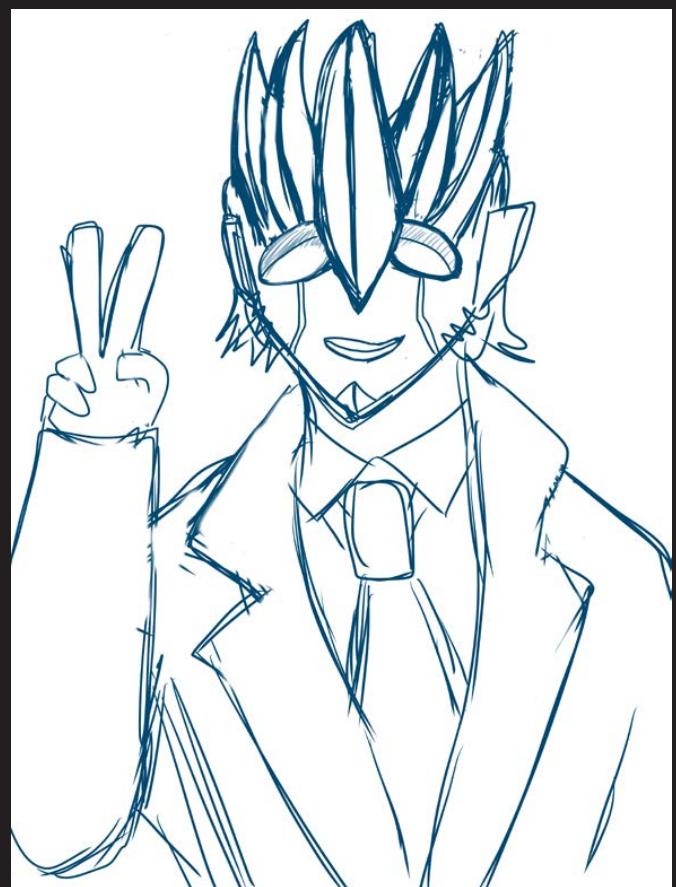
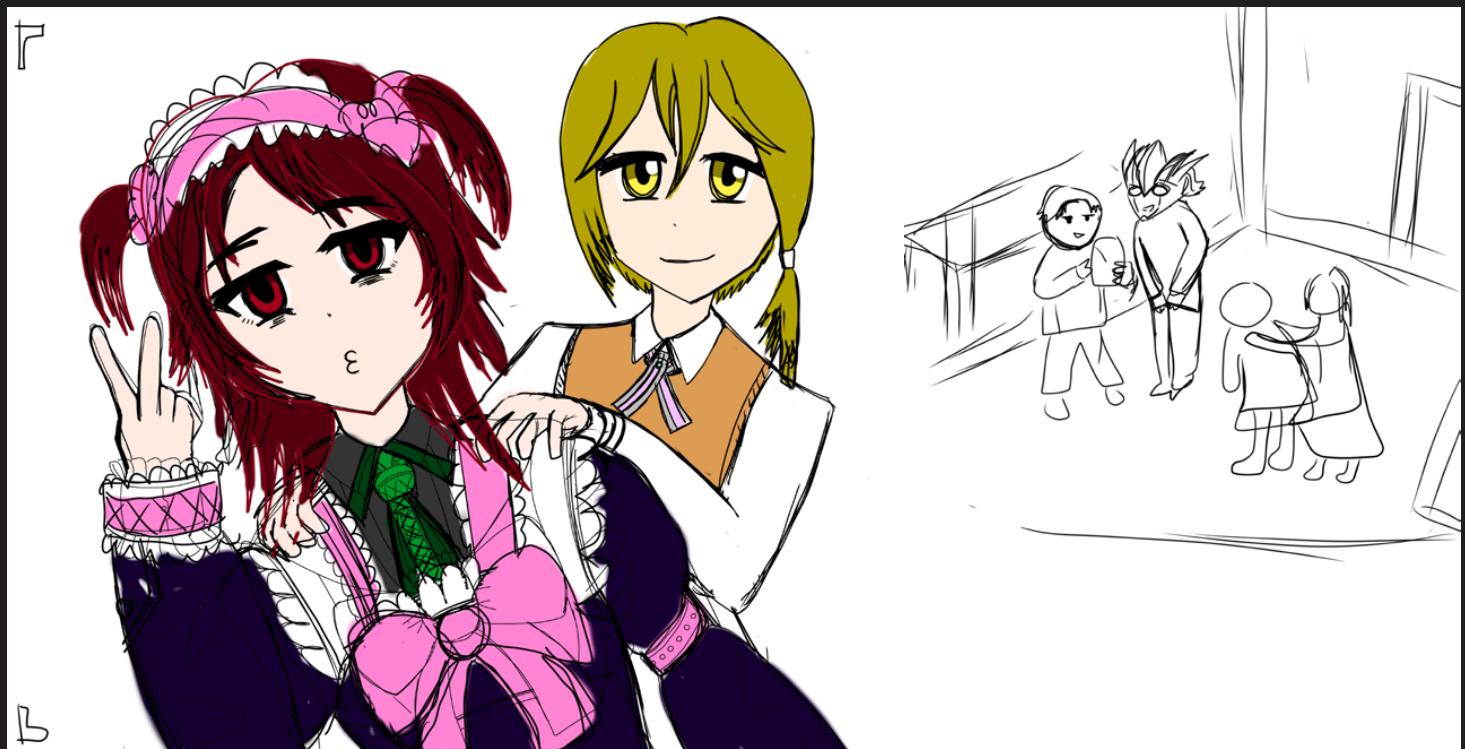
↑レオザの過去を描いたイラスト。

魅力的なキャラクターであったが、完成したゲームに登場することはなかった。

SAWVEを象徴するキャラなので、彼はいずれ必ず登場させる。

GALLERY





PHASE 4 【迷走の時代】





「機密兵器」の再定義

私は、卒業制作のテーマとしてマーチャンダイジングに着目した。

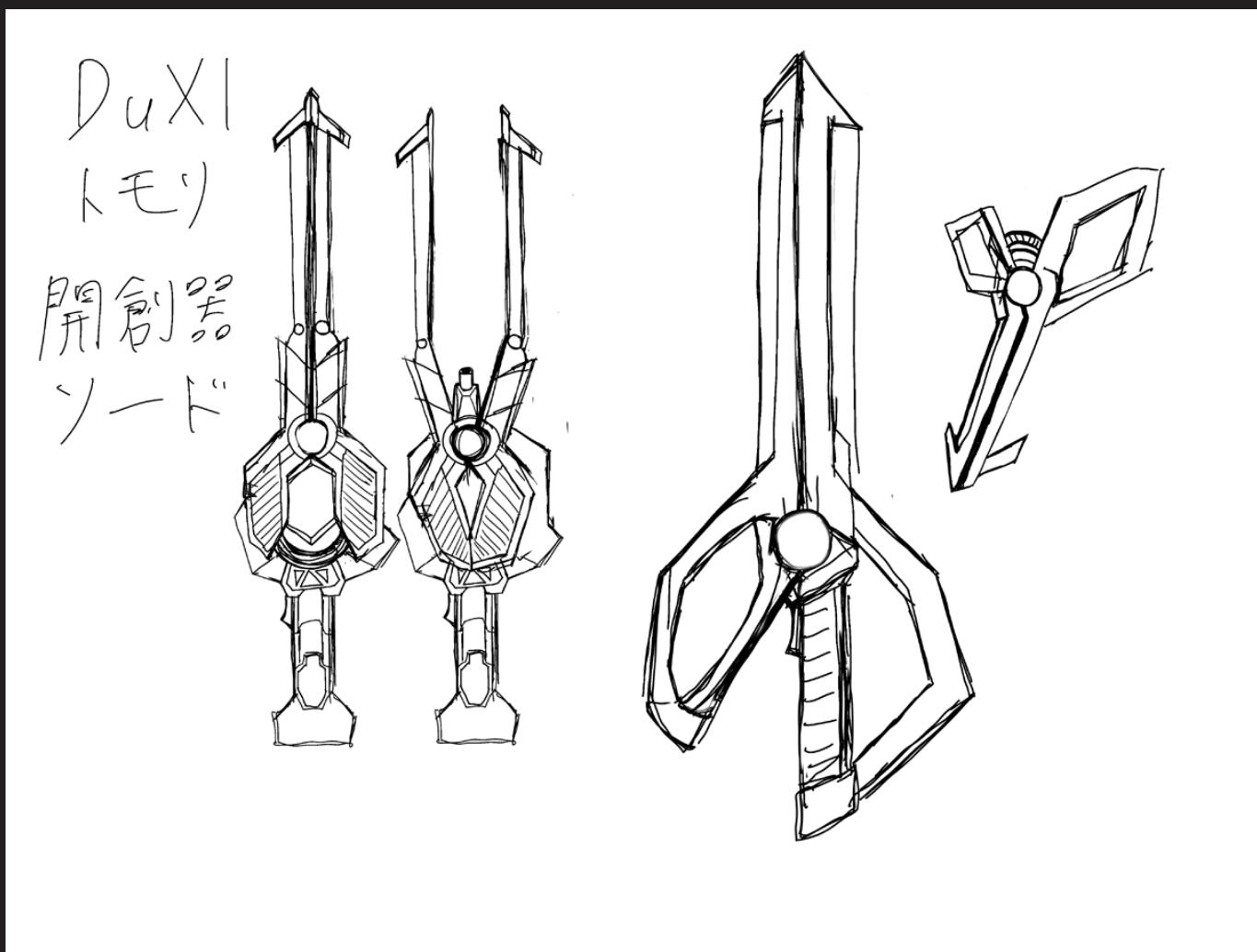
マーチャンダイジングとは、ざっくり言うと映像作品を基軸にした商品展開のことである。

例としては、「仮面ライダーシリーズ」と「変身ベルト玩具」の関係性のようなものだ。

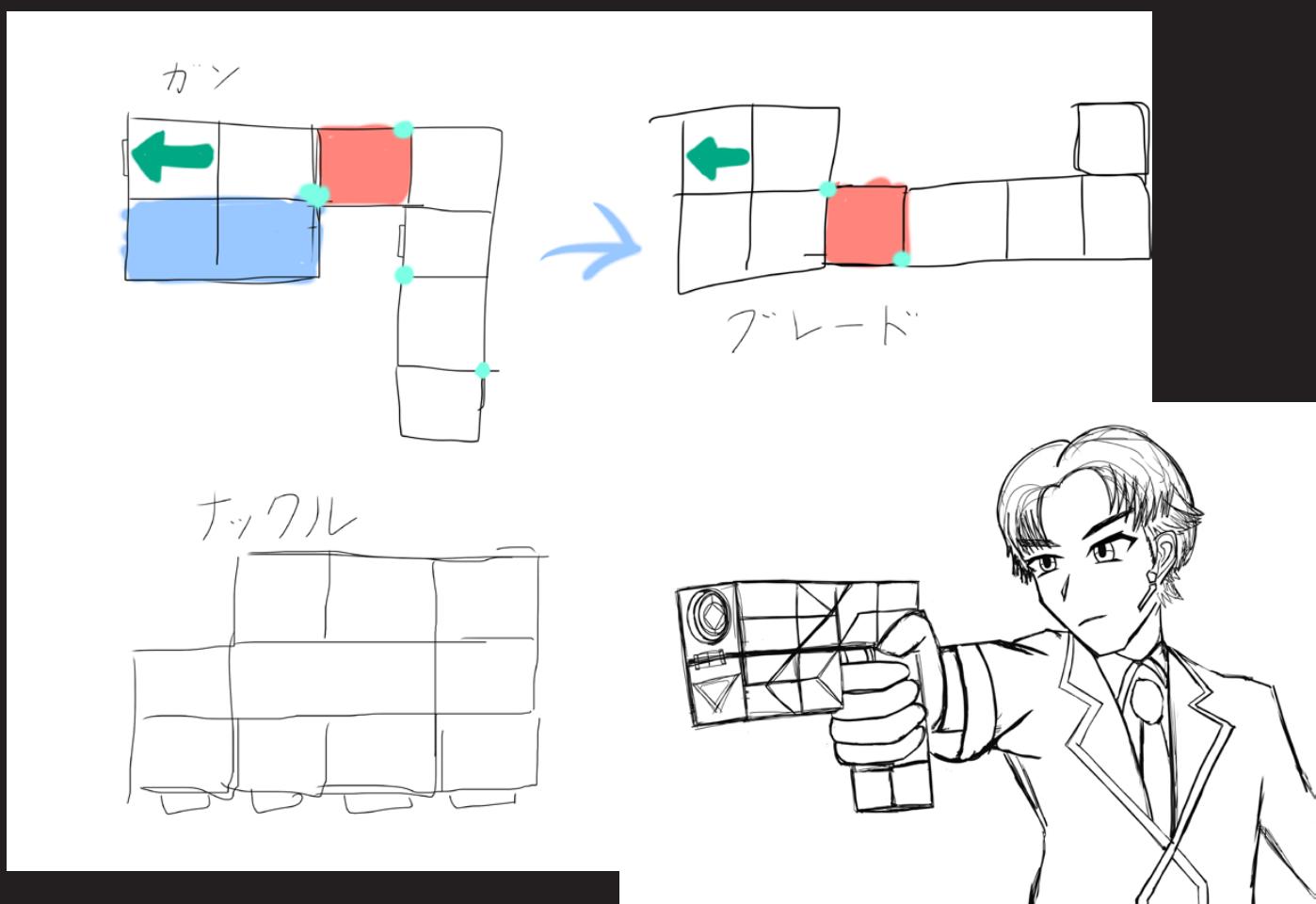
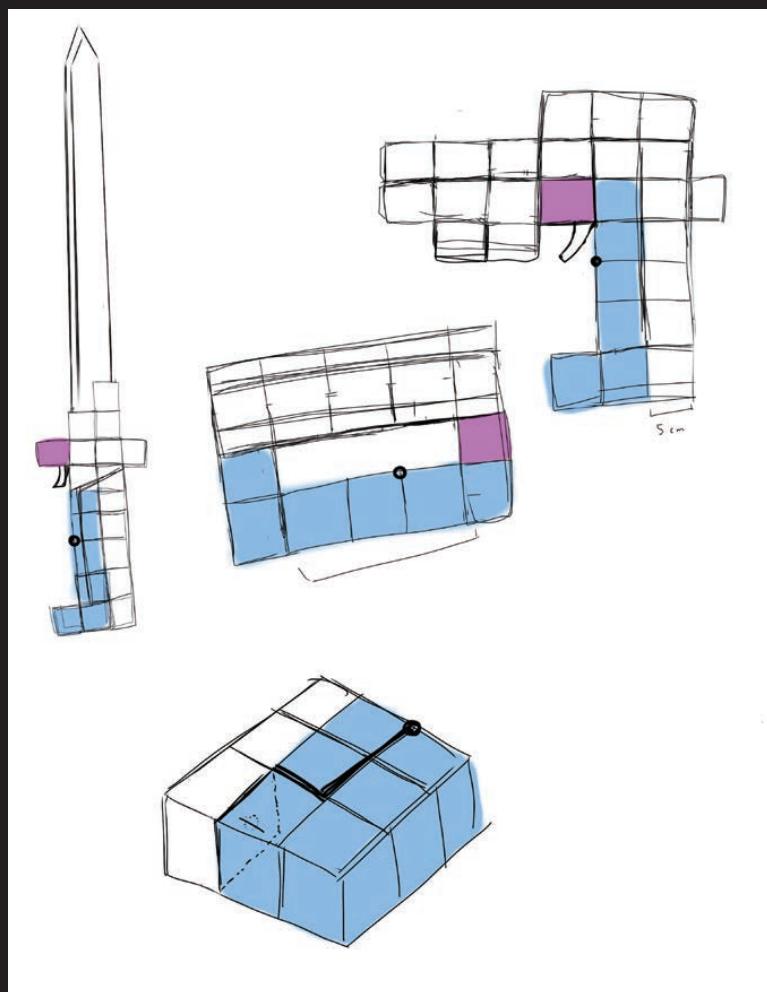
作品という枠を超えて、そこに関連する商品を売るというビジネス的な仕組みに非常に関心があったため、SAWVE もそういった路線の作品にしようとした。

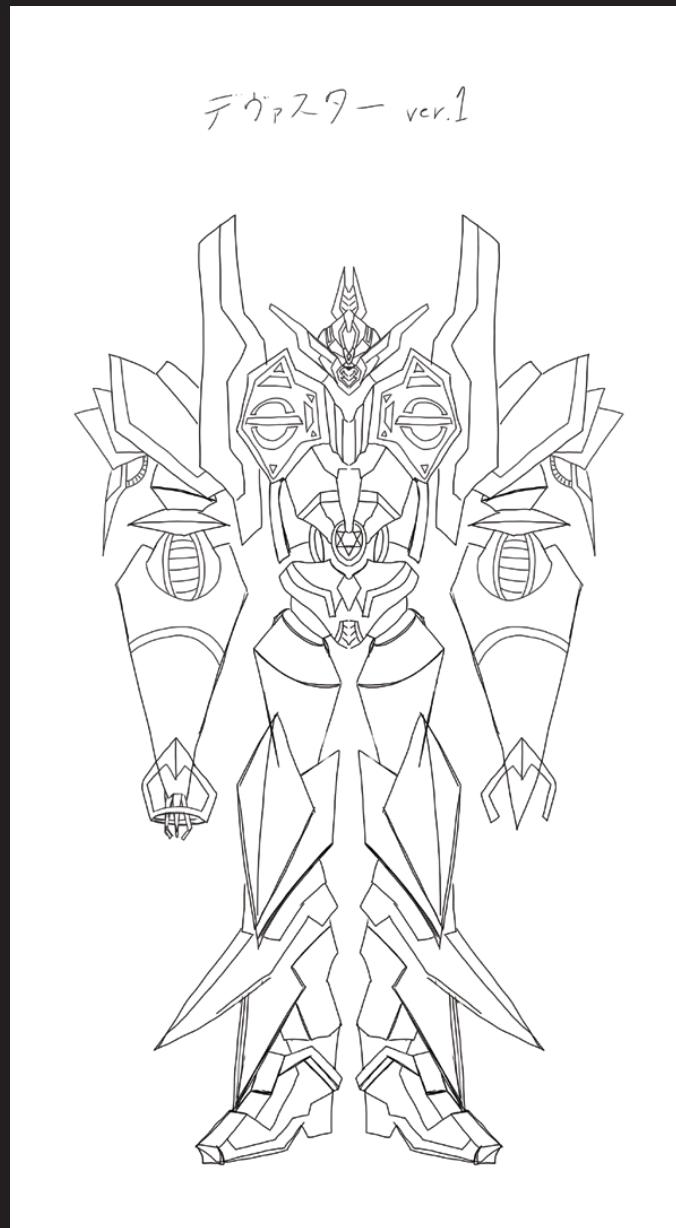
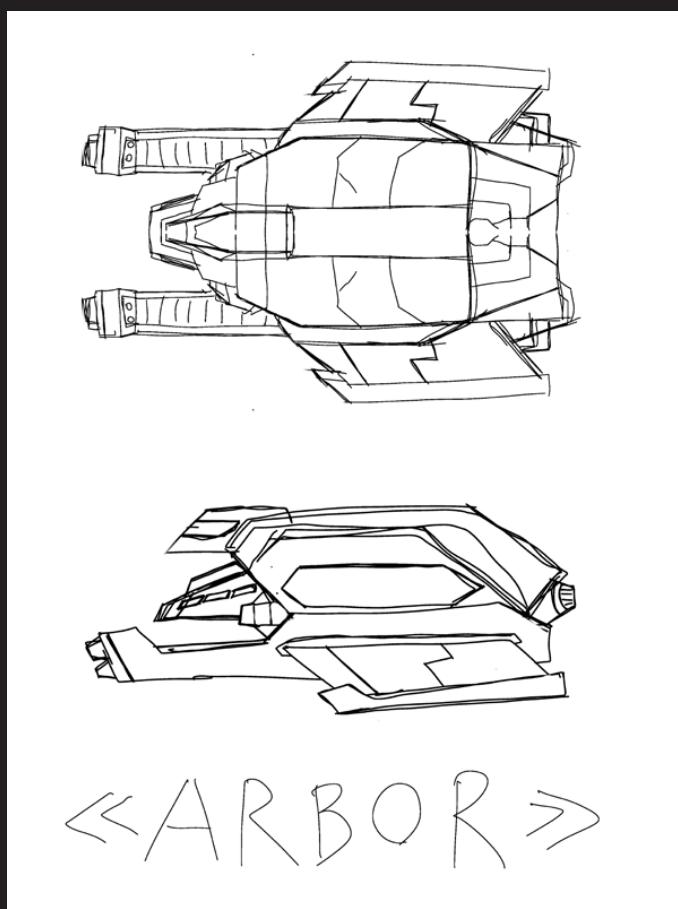
SAWVE における「変身ベルト」に値するものを考へるにあたり、「機密兵器」を再定義し、玩具として売ることを想定した設定・デザインに作り替えていった。

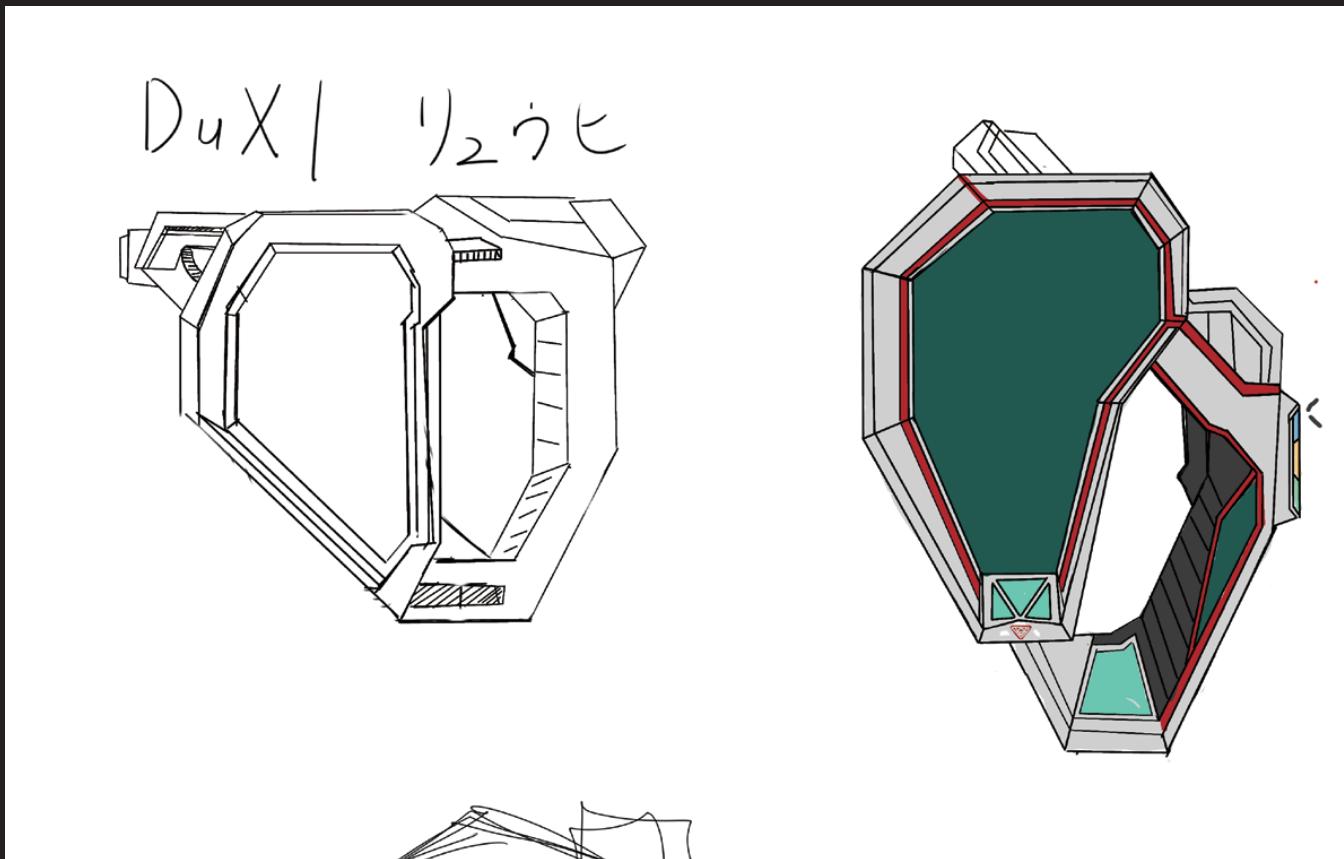


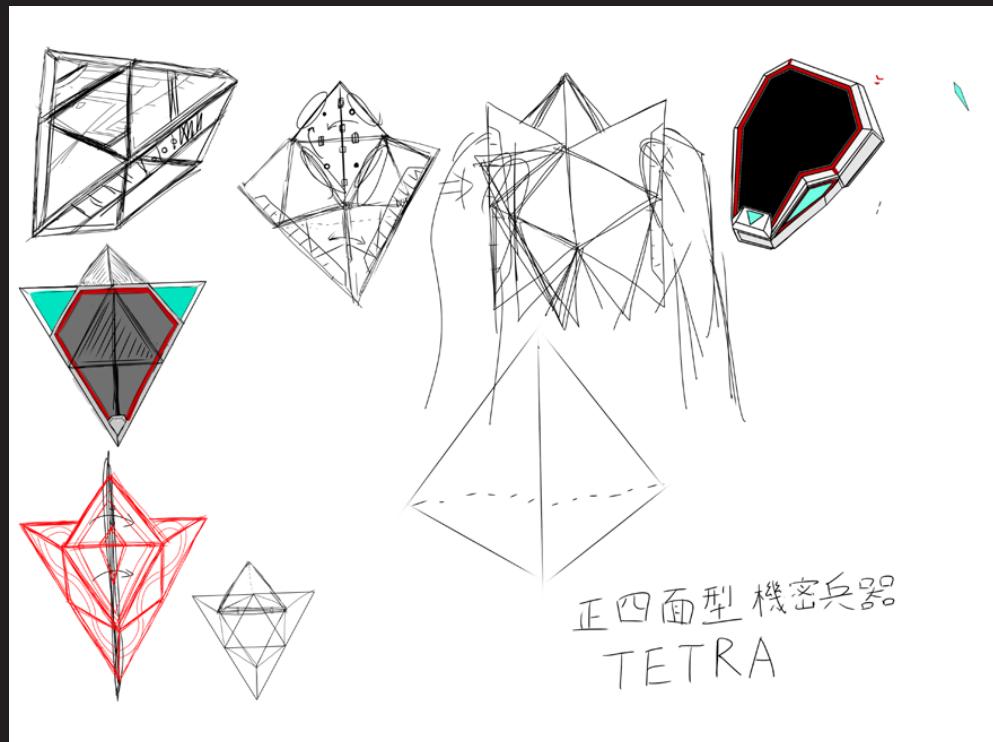


PHASE 4 【迷走の時代】









リュウヒの使用する機密兵器「テトラ」は実際に模型を制作した。
三段変形ギミックや発光ギミックを搭載している。



あらすじ

身寄りのない孤独な少女・志乃宮琉緋は、自分を拾ってくれた友人・椰見結莉乃と共同生活を送っていた。ある日、琉緋が自立を宣言した直後、結莉乃の胸が粒子となって弾け、彼女は消失してしまう。その正体は、琉緋が亡き父・凌介から受け継いだ「機密兵器」の力によって具現化した、彼女自身の孤独が産んだイマジナリーフレンドであった。琉緋の「自立したい（＝結莉乃を必要としない）」という願いに兵器が反応し、暴走した結莉乃は黒い影となって琉緋を襲う。

窮地を救ったのは、機密兵器事案対策室「ソーヴ」の捜査官・佐東東冴だった。彼は兵器を浄化し、暴走を鎮める。琉緋は心の中に結莉乃を受け入れ、悲しい別れを乗り越える。その後、琉緋は父がかつてソーヴの管理官であったことを知られ、父の遺志を継ぐ形で捜査官に任命される。孤独だった少女が、自らの運命と向き合い、新たな居場所を見出す物語。

企画経緯

実写映画として制作するにあたり、私が意識していたのは「撮影のしやすい脚本」にすることだった。そのため、今作はSF描写や派手なアクションシーンなどは排除してある。

同時期、私は実写映画を撮影することが怖くなっていた。

「ナノマシンメナス」での経験から、SFアクションを学生という限られたリソースで制作することの厳しさを知ってしまっていたからだ。

もしも、観客に理解されない作品が出来上がってしまったら。

もしも、自分の納得のいく作品にならなかつたら。

そんな不安ばかりが頭をよぎっていた。

そもそもこの脚本には、私が本来やりたかったことが入っていない。

私はこの脚本を没にするのと同時に、新しい媒体へ方向転換することを決断した。

登場人物

志乃宮琉緋（しのみや りゅうひ）

孤独な身寄りのない少女。父の形見である機密兵器の力で、無意識に友人・結莉乃を具現化させていた。事件を経て自らの孤独と向き合い、父の遺志を継いで「ソーヴ」の捜査官として新たな一步を踏み出す。

椰見結莉乃（やしみ ゆりの）

琉緋の親友。その正体は、琉緋の孤独な心が機密兵器によって実体化した存在。琉緋の自立（=不要）を拒んで暴走するが、最期は琉緋の心の一部として受け入れられ、穏やかに消滅して彼女を強くした。

佐東東冴（さとう つかさ）

ソーヴの捜査官。可変式武器「クアッドウェポン」を操り、機密兵器の暴走を鎮める任務に就く。冷徹に見えるが、行き場のない琉緋を導き、彼女を捜査官としてスカウトするバディ的存在。

有葉灯（あるば ともり） / 笹州麗王沙（ささず れおざ）

東冴の同僚。空中要塞アーバーと共に現れたソーヴのメンバー。それぞれが特殊な機密兵器を所持しており、亡き管理官の娘である琉緋を迎え入れた。プロフェッショナルな捜査官として彼女を支えていく。

PHASE 5 ノベルゲーの時代

2025年7月。

それまで映画として制作していた「SAWVE」だったが、
ノベルゲームとして再構築することを決断する。

果たしてこの決断は正しかったのか？
その答えが出るまで、もう少し。

SAWVE
-Side Ryuhi-

SAWVE
- 人類監視機構破壊部隊 -

AFTER SAWVE 2045

SAWVE -Side Ryuhi-

あらすじ

2044年、思想対立と紛争に揺れる近未来。15歳の志乃宮琉緋は、父・凌介による過保護な監禁生活に抗い、家出を決行する。道中、同じ境遇の過去を持つ十倉と出会い、共に彼の故郷へ向かうが、そこで目にしたのは政府の弾圧によって荒廃した凄惨な外の世界だった。亡き母の墓前で、琉緋は抑圧に抗い「人との繋がりを守る」という決意を抱く。

その後、GPSで追跡してきた凌介によって連れ戻された琉緋は、さらに過酷な不自由を強いられる。しかし5年後、凌介がテロで急逝。餓死寸前の琉緋は、かつての決意と共に謎のクリスタルを手にし、十倉によって救出される。

父の支配から解放され、その死を悼みながらも、琉緋は自らの意志で未来を紡ぐことを選ぶ。彼女は自分と同じように抑圧された人々を救うため、十倉が率いる紛争調停組織「SAWVE（ソーヴ）」へと身を投じ、新たな闘いへと歩み出す。

企画経緯

ノベルゲームとして制作すると決めてから初めて執筆した作品。

まだ映画として制作する感覚が抜けておらず、世界観がこじんまりとしている。

あくまで不空キャラのストーリーがあるうちの「リュウヒ編」という位置付けではあるが、他キャラクターの物語を考えることなく没となった。

この作品を書いたのち、今一度 SAWVE とはなんなのかを考え直すことにした。

登場人物

志乃宮琉緋

父の過度な支配から逃れるため家出を経験した過去を持つ。父の死後、餓死寸前の絶望の中で「人を守る力」を宿したクリスタルを手にし、覚醒。現在は紛争調停組織「SAWVE」の捜査官として抑圧に抗い戦っている。

十倉

SAWVEのリーダー。家出少女だった琉緋を救い、外の世界の残酷さと自由の尊さを教えた恩人。政府の弾圧で家族を失った悲しい過去を持つ。琉緋の意志を尊重し、彼女を組織のメンバーとして温かく迎え入れた。

志乃宮凌介

琉緋の父であり、かつてのソーヴ管理官。世界を「あまりに危険」と断じ、愛ゆえに娘を監禁に近い形で過保護に育てた。外出先でテロに遭い急逝するが、その厳格な愛情と死は、琉緋が自立する最大の契機となった。

SAWVE の主体になる部分、どうしたら委員会

一番メインになる部分で何？

琉緋が藍木隼也という呪縛から解放されること？

神の支配から逃れること？ (神=監視者・プレイヤー)

サスペンス…？

どちらかというとコメディな方が描きやすい

BIGAI=世界情報管理 AI システム・美概

SAWVE とは何か？

- 神・AI による模造・人権侵害からキャラクターの尊厳を守る組織 -

ナノメナの意思を継ぐ=AI（模造）と人間の物語

ALVA-CORP 最新鋭AIを作成した大企業。学習データの不正収集を行なっている。

テセウスヒューマン=島岡康吉の提唱した DNA を学習データに基づいて変容させるシステム

SSZ=地球上の生物データを AI によって統合・出力した人造生物

AI による模造によって、学習データから再現された人格が蔓延っている

一旦機密兵器をなかつたことにしてみる

世界情報監視システム《SAW (Synthetic Autonomous Watcher)》によって世界が管理されている世界。

そこに住む人間たちは、知らず知らずのうちに日常の行動を監視・管理されていて、その情報は秘密結社《修世委員会》の理想とする究極の秩序の構築のための礎とされている。

主人公の所属する組織は人類を監視しようとする SAW を破壊することを目的とした特殊機関。

世界を監視する端末として選ばれた志乃宮琉緋の目を借り物語が展開。

志乃宮琉緋はある日、謎の組織 SAWVE に誘拐される。

SAWVE の室長・十倉の語ることには、世界は極秘に監視システム《SAW》によって監視されているという。

SAW の正体を突き止め、破壊することが特殊機関 SAWVE の目的である。
そのための重要なファクターが、主人公・志乃宮琉緋であるという。

収集は完了し、究極の人工知能 DEUS が起動。世直しのために世界各地でテロを開始する。

自分たちが何者かの所有物・コンテンツになっている上位世界があると観測された。

自分たちは所有物ではないと反旗を翻す＝神の世界を壊す

SAWVE

- 人類監視機構破壊部隊 -

あらすじ

ジャンク屋として生計を立てる少女・志乃宮琉緋は、廃研究所での作業中に「世界の監視者」を自称する《ザ・ジャッジ》から殺害予告を受け、武装ドローンの襲撃に遭う。絶体絶命の窮地、琉緋が古びたテンキーのパスコードを解くと、空間の歪みから碧い肌の人造人間・魔王沙（レオザ）が出現し、圧倒的な力でドローンを殲滅した。

その後、琉緋は空中要塞アーバーを拠点とする秘密結社「SAWVE」に保護される。統括責任者の十倉ルアは、この世界が一人の「主人公」を軸にした創作物であり、琉緋こそが崩壊の危機にある世界を救う、神に選ばれし主人公だと告げる。

自らが開発した解析ツールが、世界を脅かす電子厄災の特効薬であったことを知った琉緋は、自分を取り巻く運命に戸惑いながらも、特殊能力者・有葉灯ら個性的なメンバーが揃う SAWVE の司令室へと足を踏み入れる。自らの意思か、あるいは上位次元の導きか。琉緋の物語が今、動き出す。
(未完)

企画経緯

一度 SAWVE という組織の存在意義を見直し、「機密兵器」の要素を排除してみた作品。

ノベルゲームという媒体を活かしたメタフィクション構造を前面に押し出した作風であり、その設定はかなり複雑怪奇。

書いているこっち側がよくわからなくなってしまったため、未完のままである。

最初にリュウヒが接触する人物がレオザであったり、ツカサがなかなか登場しないなど人物関係が特殊な作品でもある。

登場人物

志乃宮琉緋（しのみや りゅうひ）

廃品を修理して売るジャンク屋。ある日、世界の監視者《ザ・ジャッジ》から「異端者」として死の宣告を受け、追われる身となる。自覚はないが、世界の理を捻じ曲げる力を持つ「主人公」として選ばれており、自ら開発した解析ツール《リベレーター》が世界を救う鍵となる。自らの意思と、何者かの「操作」の間で揺れ動く。

佐東束冴（さとうつかさ）

脚本冒頭に名があるが、今節では詳細な接触はない。機密兵器事案対策室の捜査官であり、琉緋を「主人公」として、あるいは一人の少女として導く役割を担う青年。かつての志乃宮凌介管理官を知る人物の一人であり、世界の崩壊を止めるために「主人公」をサポートし、時にはその過酷な運命から彼女を守るために奔走する。

有葉灯（あるばともり）

SAWVEの心理学者で、白衣がトレードマーク。脳領域拡張実験の影響で「人の心が文章に見える」超能力を持つ。当初は琉緋を保護し導くが、主人公に選ばれた彼女へ複雑な嫉妬心を抱いている。掴みどころのない飄々とした態度をとるが、その内面には、自身の運命を変えるために主人公の座を渴望する危うさを秘めている。

笹州麗王沙（ささずれおざ）

第二次世界大戦期に製造された人造生体兵器「SSZ-003」。碧く煌めく強靭な肉体と、触手状に伸びる指先を持つ。心を持ってしまったがゆえに「失敗作」として異次元の牢獄へ放逐されていたが、琉緋がパスコードを解いたことで現世へ帰還。ドローン軍団を圧倒する力を見せ、恩義を感じた琉緋の脱出を手助けする。

十倉（とくら / 十倉ルア）

空中要塞アーバーを拠点とする SAWVE の統括責任者。曾祖父・藍木隼也が遺した神託「陽神記」に従い、世界の崩壊を止めるべく「主人公」を捜索していた。物語の真実を語る導き手だが、世界を「創作物」と言い切り、琉緋を役割に当てはめようとするなど、冷徹な観測者としての側面と、慈愛に満ちたリーダーの顔を使い分ける。

AFTER SAWVE 2045

あらすじ

2045年。かつて世界を震撼させたカルト組織「修世抗神会」の崩壊から10年。組織の象徴「修世主姫」であった藍木彩華は、名を「志乃宮琉緋」と変え、ジャンク屋として孤独に生きていた。ある日、彼女の元に謎のデバイス「リベレーター」が持ち込まれる。それが起動した瞬間、琉緋は旧組織の封鎖区画へと転移し、そこで対抗組織「SAWVE」の有葉灯と佐東東冴に出会う。灯は読心能力を持つ心理学者、東冴は全身義体の元警官であった。

折しも、琉緋の名を騙る過激派組織「ZARMS」が爆破テロを起こし、世界は再び混沌に陥る。自らの出自と向き合うことを決意した琉緋は、孤独な死という予言を回避するため、リベレーターの導きに従い SAWVEへの協力を決意する。

父の罪を背負いながらも「自分自身」として生きるため、琉緋は新たな仲間と共に、隠蔽された「SSZ計画」の真相と人造生命体の救出に挑む。（未完）

企画経緯

「リュウヒがラスボスの娘である」という設定を最初から開示した特大ネタバレシナリオ。この設定はナノメナ撮影終了後あたりから考えていた隠し球出会ったが、それを前面に押し出してしまったということはそれだけネタ切れたったということだろう。

この頃になると、かなり息切れしていた。

ゲームを完成させられるかどうかわからなくなり、不安に押しつぶされそうになっていた。しかし、この不安が逆に私の頭を冷静にしてくれた。

今一度、「プレイヤーを楽しませるゲームにするにはどうすべきか」という初心に立ち帰るきっかけとなつたのだ。

登場人物

志乃宮琉緋（20）

かつて世界を揺るがしたカルト組織「修世抗神会」の指導者の娘、藍木彩華。今は身分を隠してジャンク屋「オーバーホール」を営んでいる。他人に正体がバレることを恐れて孤独を選んできたが、謎のデバイス「リベレーター」を手にしたことでの自分の運命と向き合う決意を固める。

佐東束冴（さとうつかさ）

「ソーヴ(SAWVE)」の捜査官。17年前、抗神会によって全身を義体化（テセウスヒューマン）された過去を持つ。左腕のマシンガンアームを操る凄腕だが、中身は義理堅く、琉緋の生い立ちに偏見を持たずに接する。彼女の孤独を理解し、一人の仲間として迎え入れる兄貴分的な存在だ。

有葉灯（あるばともり）

ソーヴのリーダーで、人の心が文章として見える読心能力者。幼少期に「奇跡の子ら」として抗神会の研究所で育ち、尋問の道具として利用されていた悲しい過去がある。琉緋に対しては姉のように振る舞い、時には嫉妬を見せることがあるが、彼女の孤独を埋めたいと心から願っている。

笹州麗王沙（ささずれおざ）

「人造生命体」とも呼ばれる、抗神会の闇で生み出された存在。10年以上前から封鎖区画の地下に閉じ込められており、灯と脳波で交信していた。琉緋たちが救出しようとしている対象であり、彼女たちの運命を大きく変える鍵を握っている。

世界観設定

修世抗神会（しゅうせいこうしんかい）

指導者・藍木隼也が創設した巨大カルト組織。世界を神の「創作物」と定義し、異端技術を用いて人類の作り替え（修世）を目論んだ。10年前の「修世事変」で壊滅したが、人造生命体開発や人体改造など、現代科学を超越した負の遺産を世界中に遺している。琉緋はこの組織の象徴である「修世主姫」として育てられた。

ZARMS（ザームズ）

修世抗神会の崩壊後、その遺産と名を継承して暗躍を始めた過激派残党組織。本物の「藍木彩華（琉緋）」が姿を消しているのをいいことに、偽の彩華をトップに据えて旧信者やテロリストを糾合している。世界各地で爆破テロを敢行し、国連内部にも潜入して情報の抹消や機密兵器の強奪を企てる、現代における最大の脅威だ。

PHASE 6 SAWVE の時代

迷走の末たどり着いた答え。

それは、プレイヤーに没入させる「戦闘システム」の構築だった。

下地となる世界観はすでに構築された。

ノベルゲームを超えた、「戦略ノベル RPG」

新たな SAWVE の時代が幕をあける。



企画経緯

ゲームに求める「面白さ」とはなんなのか？

ノベルゲームのシナリオを考え続けた末に私はゲーム制作において最も重要なことが頭から抜けてしまっていた。

ゲームの面白さ。それは、プレイヤー自信が世界観の一部としてのめり込むことができる「体験」が提供されることにある。

自分の選択で、登場人物たちの運命が変わる。

ほんの少しの選択ミスで、キャラクターが死んでしまうのではないかという緊迫感。

プレイヤーが「自分こそが、その世界の中心なのだ」と感じられることこそ、ゲームにおける「面白さ」だと改めて考えた。

そこで私は、それまでのシナリオ重視から打って変わり、「戦略性のある戦闘システム」の導入を目指した。

同時に、私は戦闘に対するある考えがあった。

それは、会話による和解のルートを設定することだ。

たとえゲームであっても、暴力によって敵を制することを良しとしてはならない。

対話によって、人と人が「わかりあう」道を選び取ることこそ、今の社会にとって大事なことなのではないか。

これは「ソーヴ」という名前に込めた思いと同質のものである。

プレイヤーに提示されるコマンドは「攻撃」「会話」「回避」の3つ。

暴力の道を選べば、その果てに待つのは破壊のみ。

非暴力の道を選べば、その果てには和解が待っている。

どちらの道を選ぶかはプレイヤー次第である。

このゲームをプレイするあなたが、和解の道を選んでくれることに期待する。



プレイヤーは志乃宮リュウヒとして SAWVE の仲間たちと行動する。

敵は人類の脅威となりうる「ケイオス型機密兵器」だ。



ブリーフィングメニューから作戦前の準備を行う。
排除対象に応じたサポートメンバーを選択したり、
装備を設定する。



装備にはそれぞれ特性がある。
自分の戦闘スタイルに合わせた装備を設定しよう。



戦闘時には「攻撃」「会話」「回避」の三つのコマンドが提示される。

攻撃で敵の体力を削り「破壊」するか。
会話で敵の戦意を削り「戦意喪失」させるか。
それはプレイヤーのあなた次第。

敵の生存状況によってエンディングが4パターンに変化する。
あなたが選び取るのは果たしてどんな結末だろうか。

制作経緯

私はこれまでゲーム制作などやったことがなかった。

それでも、ノベルゲームであれば自分でもなんとかなるのではないかという自信があった。

ノベルゲーム専門のゲーム制作ソフト、「ティラノビルダー」との出会いにより、その自信は確信に変わった。

ティラノビルダーは、素材となる画像や音声データとシナリオさえあれば、基礎的なプログラムがすでに組まれていて、それを入れ替えるだけで誰でもノベルゲームが作れてしまうという便利な代物だった。

ゲーム制作に関してなんの知識もない私でも、選択肢を選んで分岐する程度の簡易的なノベルゲームなら一週間もかからずに習得できた。

だが、それで私は満足がいかなかった。前述の「攻撃」「回避」「会話」コマンドによって分岐する戦闘シーケンスを組み立てるには、ティラノビルダーはあまりにも不自由であった。

11月になり、私はまたギリギリのタイミングで大きな路線変更をする。

ゲーム制作ソフトをティラノビルダーから Ren' Py というソフトに乗り換えたのだ。

Ren' Py は主に英語圏にてノベルゲーム制作用に愛用されているゲーム制作ソフトである。

ティラノビルダーとは違い、ゼロからプログラムを組まなければならない「ガチ」なものだった。

そんな障壁を乗り越えるために私が活用したのは Gemini という AI であった。

私の脳内に出来上がっているゲームシステムをプログラムに書き起こしていく作業は AI とともに行った。

何度も何度も修正を繰り返す末に、思い描いたゲームが形になっていく工程は、それまでの停滞しがちだった作業環境よりも快適だった。

AI の間違いを人力で修正することもあり、この経験から若干プログラミングの能力が身についた気がする。

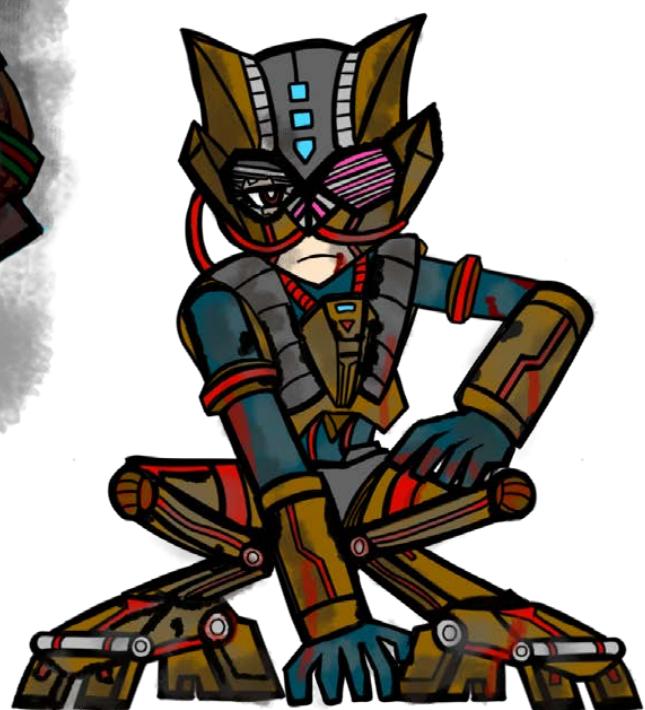
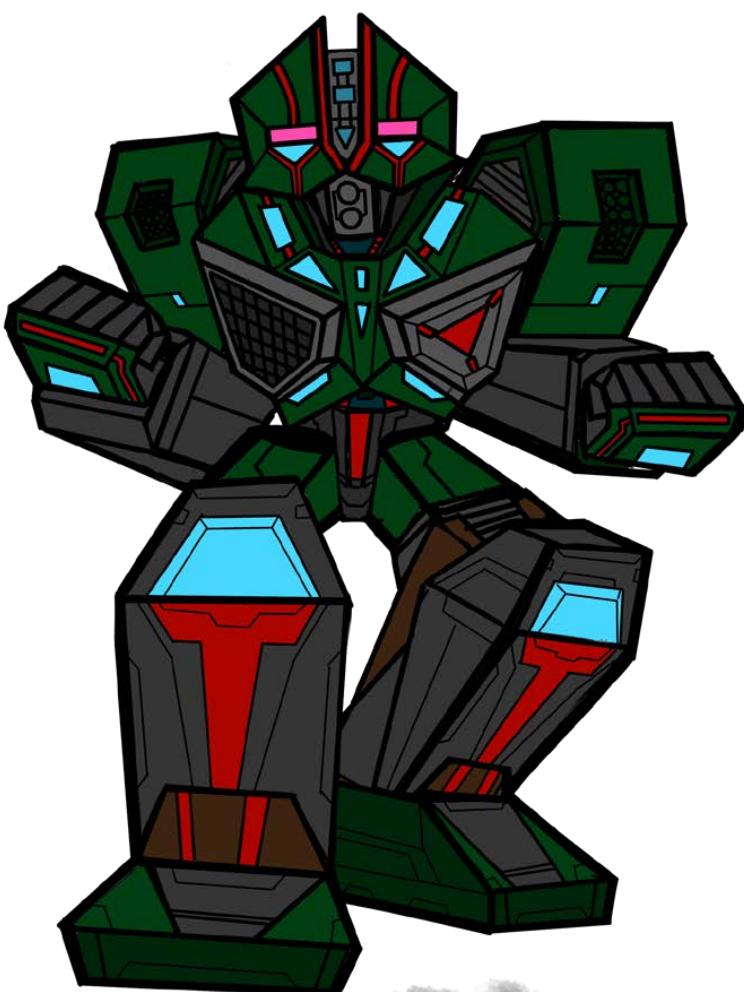


PHASE 6 【SAWVE の時代】



より親しみのある雰囲気を作るため、キャラクターデザインをカートゥーン風にディフォルメした。

事前に行ったアンケートの結果でもカートゥーン風の方が人気であったため、採用した。



PHASE 6 【SAWVE の時代】

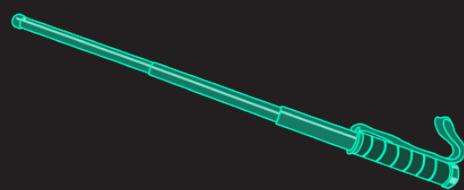


背景にのみ Gemini による生成イラストを使用した。

当初は当てにしていなかったが、修正を繰り返すたびに雰囲気にあつた

イラストを出力したため、採用した。

時間がなく絵師に頼めなかつたのが心残りである。



戻る
BACK

決定
ENTER

おわりに

「SAWVE - 機密兵器事案対策部隊 -」へと至る、
曲がりくねり、凸凹とした道のりは以上となる。

一体どれほどのシナリオを没にしてきたんだよ、という話だが、
ものづくりとはこういうものだと思っている。

作っては、悩み、作っては、悩み…。
この試行錯誤の連続こそ楽しいのだ。
そして、その果てに納得のいく答えというものは必ず出てくる。

この試行錯誤は、これからもまだまだ続くことだろう。

リュウヒ、ツカサ、トモリ、そしてレオザ。
これまで長く付き合わせてきてごめんなさい。
特にレオザは、最後の最後でゲームに登場させてあげられなくて
本当に申し訳ないです。
必ず最高の活躍の場を用意します。

SAWVEのみんな、これからもよろしく。



Age of SORVE to SAWVE

2022→2026

Takeno



《SAWVE 公式ウェブ》

本書で扱った作品の鑑賞はこちらから